

三、ハレー彗星と吉凶

「君は善い星の下に生れたね」とか、「僕は悪い星の下に生れたもんだ」などという対話を屢々聞くことがあるが、古来人間の運勢を星と結びつける習慣があるようだ。

西洋ではギリシアの昔から占星術が流行し、文学芸術の上にも宿命論が出てくる。ギリシア悲劇がそれである。

月が二十七日と数時間で、ほぼ完全に近い円を描いて回っていると考え、また、惑星があるきまりにしたがって動いていることなどを知っており、三千年も前から日蝕や月蝕について予言出来たのに、何故か彗星のことはどうもよくわからなかった。

その彗星が不幸を運んで来るのだろうか？ 地上に悪いことの起きる知らせなのだろうか？

「戦争や伝染病が起きるのではない？」「だれかの死ぬ前ぶれかもしれないね」等の不吉の前兆と考えられた。それで、彗星には「長い髪の毛の空飛ぶ魔女」という異名がある。

西暦前六十六年に彗星が現れたときには、ローマ皇帝ネロの身分は変らなかつた。しかしそのために多数の親族を殺したと伝えられている。そのためか、ネロの最後は半狂人となって死んだ。享年三十二歳だった。

また彗星は神の怒りを示すものと考えた人は多い。ハレー彗星の出現によって地球が減びるといふ内容の書物がよく売れている。

ところで、彗星は太陽に関係があるの？

西暦一五三一年、彗星のことが人間に少し分かるようになった。その後、一五四三年、「天体の回転について」といふ本が出版された。

ポーランドの天文学者ニコラス・コペルニコス（一四七三—一五四三）の地動説が一般に認められるようになったのは、彼の死後二百年も経ってからである。

西暦一五七七年、チコ（Tycho）は六五〇キロ離れたプラハの友人と同日同刻に

彗星の観測をした。つまり視差よつての観測だつた。チコは彗星までの距離は、地球と月の四倍に当る一五〇万キロと考えたが、勿論この数字は間違つていた。でも、このおかげで、アリストテレス以来信じられていた「燃える空気のかたまり」説が誤りであることが分かつた。しかしそのチコが何故か地動説には反対だつた。

ケプラー (Kepler—1571—1630) は「宇宙の神秘」という本を出版、一五九四年、ドイツにおけるプロテスタントの迫害のため、チコのもとへ行き、彼の助手となつた。チコ、五十三歳、ケプラー、二十九歳の時だつた。一六〇〇年といへば、わが関ヶ原の合戦のあつた年である。

一六〇九年、ケプラーは惑星の軌道は円ではなく、楕円であることを確信するに至つた。第一法則として、「惑星は太陽の周囲を円ではなく、楕円を描いて公転している。楕円には焦点が二つあり、そのうちの一つが太陽である」、また、第二法則は、「惑星が公転する速さは、太陽と惑星をつないだ線が毎秒同じ面積を描くようになってゐる。」つまり、面積、速度が一定なので、したがつて、惑星の動きは太陽に近いときは速く、遠いときにはゆっくりになる。

さて、自分の場合、ハレー彗星が吉と出たか、凶と出たかは已に報告済みである。明治四十二年（一九〇九）の四月、難関を突破して、神中の一年生になった暑中休暇に浜仕込の野球通気取りで、信州へ乗り込み天竜川畔を濶歩したことも先刻御承知でしょう。

明治四十三年（一九一〇）四月、二年生になって、偶々東の空に眺めたハレー彗星が、自分にどんな結果をもたらした？、語るも恐しいとか、悲しい思い出となったのです。それは、恒例の運動会で、学年対抗の選手競走の選手に選ばれ、その練習に夢中となり、学業をサボッタため、代数四十点未満という不良点をとってしまったことです。

こんな具合で、ハレー彗星が吉と出るとは先ず滅多になく、戦争とか災害等の前兆となる凶の場合が多いようだ。先ず災害の場合を考えて見よう。

(イ) ハレー彗星と天変地異

昭和五十九年九月四日の「サンケイ抄」に次のような記事があった。

「天変地異じゃないか」「路上がまるでサウナだ」などとあえぎながら、外回りのビジネスマンが冷房のビルに駆け込んでゆく。靴の底でアスファルトがゆるむ感じがわかるようだ。一度涼しさを経験してしまうとその後の残暑は一層身にこたえるもの、ビルの片かけや街路樹の緑陰を拾ってチドリに歩く人びとの足も、心なしかふらついて見えた。これまでの日本の気温の最高記録は、昭和八年七月二十五日に山形で観測された40・8度だ。

当時の山形県測候所の日誌に「空気は著しく乾燥して湿度は季節はずれの過小を示し、皮膚面の蒸発おう盛にして流汗を覚えす。かかる破格の高温は体感のみを以てしては想像し難き所なりき。高温必ずしも酷暑を意味せざる一例証として特筆に値するものと認む」

きのう八王子の39・4度などはその記録に迫ろうという恐ろしさ。気象台の寒暖計は地上一・五メートルの陰の百葉箱の中にあることになっている。日なたを歩く人や直射日光下で働く人が包まれた気温は、恐らく50度を超えていただろう。

日本列島の熱波はとくに西日本を中心にひどい。折から「平家滅亡八百年」にあ

たるが、平家がほろんだ原因に干ばつを挙げる説がある。顯著なものは治承四年（一一八〇）夏のひでりで西日本は大凶作、逆に源氏の東日本は平年作以上だったという。

現代東西の食糧戦略に与える異常気象の影響は甚大で、つい先ごろまで地球の寒冷化が始まり「氷河期が来る」の予測があった。しかしそれがこの酷暑とどう関係するか、何しろ気象庁予報は最近ひどい。

偕て天保六年、西暦一八三五年には、ハレー彗星が地球上から観測された。この年わが国の各地で気象の異変があり、美濃では大洪水に対する代官の措置に反対して農民が大挙してうちこわしを行っている。また秋田藩の能代では物価騰貴に苦しむ市民が豪商の邸をうちこわし、長崎では在留中国人が暴動をおこしたりした。

因にこの年米国の諧謔小説家マーク・トウェインが生れた。勿論、彼は呱呱の声をあげている赤ちゃんだったからハレー彗星を見ることは出来なかった。この彗星出現の前後は米国にとって多事多難な時代であった。即ちイギリスから独立し、欧州に対してはモンロー主義を標榜し、国内では南北戦争の危機が迫っていた。

「風雲急」というが、近頃の天気予報は当てにならぬ。水原秋桜子編の俳句鑑賞辞典に、芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天の川」の註釈に、「荒海や」という言葉も、このころ日本海は荒れないという説があるが、天気予報の当てにならぬ今日から見て荒れないと断言することが出来よう？ この註解を、私は非常に面白いと思つた。正に云い得て妙である。

(四) ハレー彗星は吉か凶か

本年（一九八五）一月四日、朝日新聞の「天声人語」をここに引用しよう。

——怪しげな尾を引いて突然現われる彗星（すいせい）は、ある時は吉兆と喜ばれ、ある時は凶兆と恐れられた。

ローマの皇帝ネロは「君主の代わる知らせ」と聞いて、身代わりを殺した。ノルマンジー公ウイリアム一世は「勝利の前兆」と信じてイギリスに侵入し、英国王になった。

もちろん当時、彗星の正体は、まるで分かっていなかった。万有引力の法則で有

名なニュートンも、海の水や生命や人間の靈魂は彗星に由来すると考えた。ハレー彗星が一九一〇年に大接近した時は、青酸ガスを含んだシッポに地球が包まれて人類が絶滅する、という怪説に人々は恐れおののいた。

今では、彗星の正体は直径十キロメートル以下の雪の塊だと推測されている。アンモニアやチリの混じった雪ダルマである。あの箒（ほうき）状の尾は、太陽の熱で雪ダルマの表面が気化して、秒速数百キロの太陽風によって吹き流されている姿なのだそうだ。

今回、ソ連、日本、欧州諸国、アメリカの研究者たちはチームプレーで「ハレー待ち伏せ作戦」を展開する。彗星の頭や尾の詳しい成分を解明して、太陽系誕生のナゾに迫る。

昨年暮れ、露払い惑星ベダー二号が発射した。ソ連、東欧、フランスなどの協力作品である。日本初の人工惑星も、あさって六日、鹿児島宇宙空間観測所から打ち上げられる。七月には、欧州の特攻惑星ジOTTが、ヨロイをつけて至近距離からの観測に向かう。日本の本命プラネットAも八月に飛び立つ。

ハレーが戻ってくるまでの七十六年の間に、我ら地球人は二度の世界大戦の愚を
経験した。前回のハレーを幼少時に見た人々の多くが二度目を楽しみめずに戦火で他
界した。

今回、ハレー彗星を見る世界の子どもたちのどれほどが、二〇六一年の大接近時
に、健康で彗星と再会できるだろうか。今回は「吉兆」か「凶兆」か。願わくは、
科学者たちのチームプレイを国際政治でも実現させて、「大吉」としたい。――

この「天声人語」こそ正に万人の渴望するもの、天の声というべきである。